

ノーベル賞と土壌物理学会賞

藤井克己*

何かと暗い話題の多いこの頃であるが、昨秋のノーベル賞日本人ダブル受賞は、徐々に展望の開ける明るい話題であった。一介の民間研究者で博士号も持たない田中耕一さんに、ややもするとスポットライトは集まりがちであった。これは意外性という点から仕方のないことであろう。むしろ私は好々爺然として老獪な小柴昌俊さんに注目した。

受賞インタビューの中で「スーパーカミオカンデは何の役に立つのですか？」と記者に問われて、「百年経っても何の役に立つかは分かりません。ただ人類共通の知的財産を増やすという点では貢献するでしょう」と答えられたのには、思わず喝采を送ってしまった。諸々の研究が、現場への応用、産業や地域への貢献という尺度で評価されつつある中で、この発言の意味は重い。

現在すべての国立大学は、2004年度当初からの独立行政法人化を既定路線として、以後6年間の中期目標・中期計画の策定を急ピッチで行なっている。私の所属する地方大学において、目標計画のキーワードは、①教育貢献、②研究貢献、③地域貢献の3点である。判で押したように、これらの基準が取り上げられる中で、地方大学の「個性」など、どこに生まれるのだろうかと問い返したくなる。いずれにせよ『役に立たない研究』など、ここではタブー（禁句）となっている。

このように、すべての研究活動を合目的的に捉えようとする動きが強まる中で、小柴さんの発言はまさに基礎科学の本質をとらえて輝きを増している。ただしこの発言にみなぎる自信は、スーパーカミオカンデの実現に至る周到な研究プロジェクトの計画と、その実績によるものであることを忘れてはならない。小柴氏はプロモーターとしての資質に長けた、従来にはないタイプの研究者なのである。

ここで本文の表題へと話題を移そう。「ノーベル賞と土壌物理学会賞」まさに月とスッポンの見本のようなタイトルであるが、そのレベルはおくとして、どちらも研究の内容で評価されるという点では何ら変わりがない。土壌物理学会は昨年秋の総会で、2003年度から学会賞を設けることを決定した。種類は論文賞のみで、前年度つまり2002年度に「土壌の物理性」に掲載された論文を対象とするものである。学会のもっているトータルな力量は、何よりもその刊行物である学会誌掲載論文によって評価されることは言うまでもない。学会賞（論文賞）を創設することにより、「土壌の物理性」への投稿のインセンティブが高まり、そこから研究動向のダイナミズムが自ずと窺われるような活況を呈することを期待したい。